お嬢頭目の婿選び

濠門長恭

目次

１．奇策で誘拐！……- 3 -
２．花婿候補の狼藉！……- 16 -
３．お嬢は女王！
４．初めての快楽責め！
５．花婿候補の裏切り！
６．過酷な拷問！
７．本命の花婿候補？
後書き

１．奇策で誘拐！

「お嬢、来やしたぜ」

シイラは灌木のかげから街道を見とおした。二頭立ての馬車がのんびりと走っている。護衛は馬車の前後に２騎ずつと左右にも１騎ずつ。馭者台の２人も武装しているだろう。

「ほんとうにやるんですかい？」

副頭目のカシムが念を押した。髭のかたまりからのぞいている目を何度もしばたたく。

不安そうなのも無理はない。シイラの率いる盗賊団は２０人だが、偵察に３人と退路の確保に４人を使っている。武装した傭兵８人を相手にするには、１３人（＋シイラ）だけでは心許ない。

「やるよ」

短く答えて、シイラは身にまとっていたシーツを脱ぎすてた。

「打ち合わせどおりの手はずでいくよ。あた

いがこんな格好になったのは、おまえたちを楽しませるためじゃないんだからね」

シイラは腰に短い布を巻きつけただけの半裸。というよりは、ほとんど素裸だった。素足には粗末なサンダル。左手には壊れた手枷まで嵌めていた。どう見ても、盗賊団の頭目にはふさわしくない姿だった。

男たちの視線が自然とシイラに集まる。いちばん小柄な男よりも頭半分は低いのに、彼女はほかの誰よりも目立つ存在だった。

わざとボロボロにした布は、かろうじて股間を隠しているだけ。きゅっと引き締まった臀部のすれすれまで太腿が露出している。

剥き出しの胸は――下半球はじゅうぶんに丸みをおびていても、まだ熟しきっていない乳房の先端で、薄いピンク色の小粒な乳首がツンと上向いている。

シイラの顔は、愛らしい美少女とはかけはなれていた。短く切った黒髪、細くつりあがった目、鋭くとがった顎。少年かと見まがう

ような顔つきだが、それだけに、浅黒い顔にくっきり浮かびあがるピンク色のぽちゃっとした唇が、ぞっとするほど官能的だった。

シイラがみずから企てたこの仕事は、手下どもの目を楽しませてやるだけの価値があった。獲物は、貿易商マーチン・ダルトンの娘と息子。ガキどもを誘拐すれば、数年は遊んで暮らせるだけの大金を手にできる。隠れ家にしている村にも分け前をはずめる。

小人数の隊商を襲うとか、ちょっと裕福だが私兵を雇う余裕まではない商家に押しこむとかして地道に稼いでいたほうが安全なことはたしかだ。

しかし、シイラは危険な賭けに踏みきった。小娘が盗賊団を率いているのは、それなりの事情があるのだった。

半年前、この連中をたばねていたシイラの父親が急死した。誰が跡目を継ぐかとなると、皆が納得するだけの実力者がいなかった。さんざん揉めて、シイラが婿に選んだ男を頭目

とすることに決まってしまった。反対したのはシイラだけだった。

副頭目のカシムは、おしめを換えてやった女の子を嫁にするつもりなんかないと言って、さっさとおりていた。ナンバー２の地位を確保する賢明なやり方かもしれない。

そういう経緯だから、婿候補は小頭ばかりだった。

ケダーなんかは、シイラの父親より年上だし女房も２人いるから論外として。

ひとり身のイルファンでも２９歳。ナイフの腕はピカイチで、若い衆には人気もあるが、シイラの目から見ても考えが浅い。

頭目としての最有力候補はモハド。自分の歳の２倍を超えている点を我慢すれば。頭もそれなりに切れるし腕っ節も強いのだけど。なんとなく気にいらない。顔も頭もつるつるに剃っている。その印象が強烈なので、顔の細かい部分がさっぱり思い出せない。そのせいでもないだろうと、シイラは思うのだが。

こう見てくると、頭目にふさわしい男も、亭主にしてもいいかなと思える男もいない。
いっそのこと、自分がほんとうの頭目になってやろう。シイラは、そう考えるようになっていた。それには、皆を納得させるだけの力量を示さなければならない。
――シイラたちのひそんでいる林に、馬車が近づいてきた。
「さあ、やるよ。あんたの出てくる頃合が大切なんだからね」
「わかってまさ」
カシムはボロ布の下まで手を這わせて、ぺろんとシイラの生尻を撫でた。
「ふざけてる場合じゃないよ」
「いや、役得ってやつで」
おしめを換えてやった女の子の尻を撫でて、なにが役得なんだろうか？
なんていぶかしんでいるうちにも。先頭の護衛がシイラの目の前を通りすぎた。
林の中は道が狭くなっているので、馬車の両

側には護衛がついていなかった。
（いただき！）
　シイラは林から飛び出した。
『おたすけください！　だんなさま！』
　公用語で叫びながら、シイラは馬車の扉に取りすがった。
　馬車が止まった。馭者台の男が飛びおりてシイラに駆けより、馬車からひきはがそうとした。
『おねがいです。おたすけを！』
　シイラは扉にしがみついて叫びつづけた。
　シイラが男だったら、もっと警戒されていただろう。とっくに撃たれていたかもしれない。だが、相手は裸同然の少女だ。荒くれの傭兵でも、手荒く扱うのをためらった。
『どうしたのですか？』
　馬車の扉が開いて、中年の女性がシイラの前に立った。シイラの姿を見てちょっとだけ眉を吊り上げたが、驚いた様子ではなかった。街中でも、乞食女などはこれにちかい身なり

をしている。
『お金に困っているのですか？』
　胸元までぴっちり閉じたドレスの女性は、家庭教師のスミス夫人だろう。そこまで、シイラたちは調べあげている。
　シイラは馬車の中をうかがった。白い風通しのよさそうなドレスを着た若い女がベティアン。膝までのズボンと窮屈そうなジャケットを着た少年は弟のセオドア。シイラには、札束がならんで座っているように見えた。
『じひぶかいだんなさまがた。どうぞ、わたしをおたすけくださいませ』
　シイラは知っているかぎりのていねいな言葉を使った。
『わるものから、にげてきました』
『奥様、小娘の言葉にだまされないでくだせえよ』
　カシムが紙切れをふりかざして、林から姿をあらわした。
『その娘は、あっしが買い取ったんでさ。こ

の証文が証拠でして』
　派手だが垢じみた衣装。ごてごてした首飾りと金ぴかの指輪。誰が見ても、カシムは身分の高くない小金持ち――さらにいえば、女衒そのものだった。
　シイラは怯えたふりをして家庭教師の背中に隠れた。
『お金で人を買うなんて、許されないことですわ』
　若い女が馬車の中から薄い敷物を投げた。スミス夫人が、それをシイラの肩にかけた。
『でも、姉さん。この国では法律で人身売買が認められているんだよ』
　馬車の中から聞こえてきた分別くさい声に、シイラはカチンときた。
（か弱い女の子が素っ裸で助けを求めてるってのに、ずいぶんな言いぐさだね）
　開け放されたドアから少年のところまで、障害はなにもなかった。
『だまされて、さらわれたのです！』

シイラは馬車に飛びこんだ。奥に座っているベティアンは無視して、右手で少年の膝にとりすがった。
『わるものをおいはらってください』
枷を嵌められた左手はだらんと下げて、姉弟の視界から隠すようにした。
『この男の言い分もききましょう。証文がたしかなら、娘は渡さなければならんです』
騎馬からおりて引き返してきた隊長格の傭兵が、カシムに近づいた。
『いやです！　わたさないでください』
シイラは右手を少年の腰にまわし、ぐっと身体を近づけて少年を見あげた。
『だんなさま、どうか、おじひを』
シイラと同い年くらいの少年は裸の少女をどう扱っていいかわからず、目を白黒させている。ちらちらと、肩のすこし下のあたりまで視線が揺れていた。
その視線をじゅうぶんに意識しながら。
ぐにゅっ……と、シイラはわざと乳房を少

年の腿に押しつけた。
（あら、ま！）
　シイラの鼻先で、少年の肉体の一部が素直な反応を示した。
『おたすけください』
　シイラは右手を少年の背中に巻きつけて身体をずり上げながら、いっそう強く抱きついた。ぐりぐりと乳房をこすりつけてそちらへ注意をひきつけておきながら、左手をそっと上げて――手枷に隠しておいた細身のナイフを右手に握った。
『ばしゃをおりなさい』
　少年の首筋にナイフを突きつけて、せいいっぱいに低い声をつくった。
『え……！？』
　シイラは馬車の中で少年と位置を入れ替えて、手枷の角で背中をこづいた。
　馬車の外では、カシムが傭兵隊長にナイフを突きつけていた。
「野郎ども！」

カシムの合図で両側の林から手下たちが姿をあらわした。銃を傭兵たちに向けている。
シイラは自分で手枷をはずしてから、まだ馬車の中でおろおろしているベティアンの腕を引っ張った。
『なにをするの！　この薄汚い手をはなしなさい！　今すぐわたしと弟からはなれなさい。おまえたちを見のがすよう、護衛に頼んでやるから』
甲高い声でわめきながら、カーテンにしがみついて馬車からおろされまいと抵抗するベティアン。ナイフで脅されても、平気で払いのけようとする。
手を焼いて、シイラはベティアンの処置を手下にまかせた。
ベティアンは切り裂いたカーテンで手首を縛られて、馬車から引きずりおろされた。
『覚えてなさい。こんな屈辱、絶対に許さないんだから。みんな縛り首にしてやる！』
手下の肩に担がれて、ベティアンの脚は空

を蹴っていた。
『子供たちを誘拐するのですね』
　ベティアンとは対照的に静かな声で、スミス夫人がたずねた。
『子供たちは学校の寄宿舎へ戻らなければなりません。わたしが身代わりになります』
「あんたでは金にならないよ」
　スミス夫人がきょとんとしているので、公用語に切り替えた。
『てがみをダルトンにわたしてください』
　手下のひとりが、スミス夫人に封筒を手渡した。盗賊団の中ではいちばん教養のあるケダーが半日をかけた力作だった。

We got yua doter & son.
Pay ￡10,000.
When OK ,
Put bluu Nashonal Flag on haus.
We will contakt.
1 week after,
We will KILL yua doter & son.

傭兵たちを立ち木に縛りつけてから、彼らの馬を奪ってシイラたちは悠々と引き揚げた。

隠れ家への道を知られないよう、姉弟には目隠しをした。少年はカシムの鞍の上でおとなしくしていたが、姉のほうは手に負えなくて、ズダ袋に押しこんで馬の背に括りつけた。そこまでされると、さすがにこたえたのか、静かになった。

２．花婿候補の狼藉！

大仕事のヤマをひとつ越えて、シイラは自分の家でくつろいでいた。

家全体が大きな土間になっている、農村ではごくふつうの家だった。ふつうと違うのは、シイラが寝転んでいるのが藁の上に敷いた毛布ではなく、天蓋のついたダブルサイズのベッドだということと、この家にはシイラしかいないということ。そのふたつだった。

シイラは母親と幼い頃に死別していた。父の第２夫人と第３夫人と第４夫人は、父の死後にさっさと再婚していた。

ひとりぼっちでも、さみしくはない。盗賊団の仲間がいる。カシムは叔父も同然だし、その子分のひとりのラジフは歳のはなれた従兄みたいな存在だった。

そういった仲間を手下として率いるのだから、気苦労は絶えない。この半年間で、男っ

ぽい格好と蓮っ葉な言葉遣いが身についてしまった。今も、夜の冷え込みにそなえて厚手のズボンと虫除けに長袖のシャツを着ている――そんな男装が、成熟と未成熟のはざまで危ういバランスをたもっている少女に中性的な妖しい魅力を醸し出していることなど、シイラは気づいていない。

女性の悲鳴を聞きつけて、シイラは上体を起こした。ほんの一瞬の悲鳴だった。あとは、人の争う気配もない。耳をすませても聞こえてくるのは虫たちの鳴き声ばかり。

しかし、シイラはサンダルを突っかけ、ナイフをつかんで家を飛び出していた。

ごくふつうの山村を隠れ家にして、ふだんは村人たちと共同生活を営んでいる盗賊団だが、やはり『開けゴマ』はある。

すぐには売り飛ばせない熱いお宝や、狩猟に使うには不向きな武器を隠しておく洞窟が、それだった。おおげさにいえば宝物庫であり武器庫だった。隙あらば逃げ出そうとするお

宝を監禁するための牢もそなえている。
「お嬢……」
　洞窟の入口に立っていたイブルが、山道を駆け上がってきたシイラの姿を見てうろたえた声を出した。
「どきな！」
　イブルを突きとばし、蔦や枝を絡みあわせて偽装した入口は蹴とばして、シイラは洞窟へ躍りこんだ。
　心配していたとおりの状況になっていた。丸太で組まれた牢格子は開けっ放しで、その奥でカーテンが揺れている。
　カーテンをかき分けると、すでにお馴染みの光景が目に飛びこんできた。ふたりの男が人質を押さえつけ、もうひとりがその上にのしかかろうとしているところだった。
　お馴染みといったのは――女をさらってきて手篭めにするのは、この男たちにとってごく普通のことだからだ。幼い頃から何度も覗き見してきた光景だった。

いつもなら、そう目くじらをたてるほどの出来事ではない。犯された女は、たいてい相手のひとりを亭主に定め、そのうち亭主をこき使うようになる。シイラの父などは３人も抱えこんでいたものだから、夫婦喧嘩の勝敗は最初から分かりきっていた。

高慢ちきな白人娘が薄汚い現地人に犯されて、まだ威張っていられるものか、このまま見物していたいと思わなくもなかった。

けれど、ベティアンを組み敷いているのは、シイラの花婿に立候補した男だった。

「馬鹿野郎！」

シイラはモハドの剥き出しの尻を思いきり蹴とばした。

「うわっ！」

ずり下げたズボンに足をとられて、モハドはぶざまにすっ転んだ。

「勝手なまねをするんじゃないよ。とっとと出ていきな」

「そうツンケンするこたあ、ねえだろ」

モハドは立ち上がってから、まだ聳え勃っている逸物を隠そうともせずに、悠然とズボンを引き上げた。
「いつものように黙って覗き見してりゃいいじゃねえか。それとも……」
毎日きちょうめんに剃りあげている頭を、モハドはツルリとなでた。
「この娘にやきもちか？」
「お嬢が心配するのも、無理はねえやな。こいつ、いい身体してるからね」
アルにからかわれて、シイラは怒りに顔を染めた。ベティアンは白いドレスを破られて、昼間のシイラと似たような姿になっていた。けれど、似ているのは身なりだけだった。
軽くカールした長い金髪。ふっくらした身体にメロンのような乳房。何人でも子供を産めそうな張りのある腰つき。どれもこれも、シイラにないものばかりだった。
「寝言こいてんじゃないよ。弟の目の前でってのは、ちょいとかわいそうじゃないか」

なんとか、叱りつける口実を見つけたと思ったのだが。
「なに、ガキにはお寝んねしてもらったさ」
モハドが牢の隅を顎でしゃくった。
そちらを見て、シイラの顔が蒼ざめた。セオドア少年が、くてっと倒れていた。額から血を流している。
「モハド、おまえ……」
「心配ねえ。気をうしなってるだけさ。ちゃんと手加減したぜ」
「馬鹿野郎。手加減もくそもあるか。打ちどころが悪ければ死ぬぞ。ダルトンを本気で怒らせることになるんだぞ」
警察は怖くない。幹部は頓馬ぞろいだし、下っ端の何人かとはナアナアだ。
怖いのは駐屯軍だが、あこぎな貿易で本国からも顰蹙をかっているダルトンのために動くことはないと、シイラは踏んでいる。動くとすれば賄賂だ。
身代金は、たかだか１万ポンド。シイラた

ちにとっては目玉も肝っ玉もでんぐり返る大金だが、ダルトンはちょっと痛い出費くらいにしか思わないだろう。賄賂を使うことで自分の弱みを握られる危険を冒してまで、軍隊を動かそうとは考えないはずだ。

けれど、息子を殺したり娘を傷物にすれば、どうなるかわからない。

（それを怒らなくちゃならなかったんだ）

認めたくはなかったけれど、モハドのいうようにやきもちで判断力が鈍っていたのかもしれない。

「へっ、そんなにダルトンが恐ろしけりゃ、はなっから手を出さなきゃよかったんじゃねえですかい？」

臆病なくせに威勢だけはいいイブルが、後ろから毒づいた。

「いいから、とっとと出ていきな！」

シイラは男どもを追い払った。

「……キイキイ声は願い下げなんだけどな」

ぼやきながらシイラは、床にうずくまって

いるベティアンの横にしゃがんだ。
『こわいことしました。おゆるしください』
　怖い目にあわせてごめんね。そう言いたかったのだが、彼女のボキャブラリーでは卑屈な言いまわしになってしまう。
　口に詰めこまれている白い布切れを引っ張り出してやると、さっそくベティアンは金切り声をあげはじめた。
『さわらないで、薄汚い猿！　お前たちなんか、父様にたのんで皆殺しにしてやる！』
「ろくすっぽ水浴びもしないで香水ばかりつけてるお前たちのほうが、よっぽど汗臭くて汚いよ」
　毒づいてから、公用語に切り替える。
『けがは、ないですね？』
『ほっといて！　さわらないでったら！』
『わかりました』
　抵抗したときにビンタでも喰らったらしく頬が腫れているけど、ほかには傷もないようだった。

『でも、おとうとさんはてあてをしなければなりません』
　シイラは、まだ気をうしなったままのセオドアを腕にかかえた。盗賊稼業にいそしんでいないときは、農作業の手伝いもしている。細っこい少年くらい、ひとりで運べた。
『弟から手をはなしなさい！　どこへ連れていくの！？』
　ベティアンは叫ぶだけで、シイラにつかみかかったりはしなかった。
（まったく……ぎゃあぎゃあ喚いてれば、王子様だか騎士様だかが助けにくると思ってるんだろうね）
　シイラはセオドアを腕にかかえて、白人娘に背を向けた。傷の手当てをするには、あれこれと道具を持ってくるより、本人を家へ運んだほうが手っ取り早い。それを公用語で生意気な白人娘に伝えるだけの忍耐心は、シイラにはなかった。
『やめなさい！　弟を連れていかないで！』

金切り声を聞き流して、シイラは洞窟を出た。
「ガマル、ラーナ。手伝ってよ」
月のさわりで女小屋にこもっているふたりを呼んで、白人娘を見張るように頼んだ。
「牢へ閉じこめるのは、ガキを返してからでいい。洞窟から逃げ出さないように、それだけを見張っていてちょうだい」
「そうね。『薄汚い猿』が近づいたら、また引きつけを起こすだろうしさ」
洞窟のかげからシイラたちの様子をうかがっているベティアンをちらりと見て、ガマルがあざ笑った。
「そういうことね。それと――お嬢様のお口にあいそうなお食事を、なにかさしあげてちょうだい。お腹がくちくなれば、かんしゃくもおさまるかもね」
シイラと女たちは顔を見合わせて笑った。
「で、お嬢はその坊ちゃんと遊ぶんだ？」
それにはこたえず、シイラは少年をおぶっ

て山道をくだった。
——ベッドに少年を寝かせて、額を調べた。倒れたときに岩の角に打ちつけてできた傷らしかったが、皮膚が切れているだけだった。
（逞しいけど、弱っちいねえ）
太い眉、角ばった顎、短く刈りこんだ濃褐色の頭髪。そのひとつひとつは男くさいのに、ほっそりした顔の中にならんでしまうと、なんとなくひ弱さを感じてしまう。
（売り飛ばすわけじゃなし。器量の良し悪しなんか、関係ないんだよ）
つまらないことに興味を持った自分を叱って、シイラは傷の手当てにとりかかった。
女奴隷を買えるほどの値段がする救急箱から泡の出る水を取り出して傷口を清め、傷口が膿んでいてもたちどころに治してくれる魔法の軟膏を、惜しげもなく塗ってやる。
『う……ん？』
手当ての途中で、少年が意識を取り戻した。
『姉さんは！？』

　起き上がろうとする少年の肩をシイラが押さえた。ゆっくりと上体を起こしてやる。
『しんぱい、ありません。おとこたち、おいはらいました』
「おねえちゃんが？　あいつら、おねえちゃんのいいつけをきくの？」
　少年が現地語でたずねた。
「おや……あたいたちの言葉を話せるの？」
「うん。ぼく、おはなしする。うまいない。きくもできる。すこし、うまい」
　少年がシイラの目をまっすぐに見て答えた。
　言葉遣いのせいだろうか。あどけない子供に見つめられているようなくすぐったさをシイラは感じた。
「あたいも、話すのは苦手だ。それじゃ、おたがいに自分の言葉で話そうか」
『そうだね……ここは、どこ？　なぜ、ぼくはここにいるの？』
　くすぐったさが、うんと減った。
「覚えてないのかい？　あんたは頭に怪我を

したんだ」
　シイラはベッドの端に腰をおろして、少年の頭に包帯を巻いていった。
「ここは、あたいの家さ。手当てがすんだら、姉さんのとこへ連れてってやる――ていうか、牢へ戻ってもらうよ」
　少年は、しばらく黙っていた。それから。当然といえば当然の質問なのだが、この状況にはふさわしくない質問をした。
『きみ、名前はなんていうの？』
「シイラ」
　手を動かしながら、短く答えた。
『ぼくはセオドア。みんなはテオって呼んでいる』
「ふうん……」
　それきり会話は途絶えた。シイラは、少年の聡明さに感心していた。
　姉がほんとうに無事なのかとも、自分たちをどうするつもりなのかとも、少年はたずねなかった。

シイラのこれまでの言葉に、その答えは含まれているのだけれど。たとえばベティアンなら、うんざりするほど同じ質問を繰り返すんじゃないかと、シイラは思ったのだった。